

五、方法的な睨み合い

既に目標においては、かく一致している。近世のすべての被支配者は、アナキズムの社会を目がけている。が、そこに到達するまでの過程的な——ひとくちに言えば方法的な問題において、それは幾派にも分裂しているのである。

藤森成吉氏が「今更人間の自由——アナの人は決してプロレタリアートの自由とは言わない——とか、権力——アナの人は決してブルジョア政権とプロレタリア政権とを区別しない——とかの問題で、アナの人と論争する気はない。ただ一言、マルクス主義とアナキズムは究極において同じであることだけは言って置く」といっていることは、即ち、過程において正当アナキズム派と、マルクス主義派とが、見解を異にしているということの弁

解である。その立場にあるものは、正当アナキズム派を、過程を無視している空想派と唱えている。それは「アナの人は決してプロレタリアートの自由とはいわない」とか、「アナの人は決してブルジョア政権とプロレタリア政権とを区別しない」などという口吻によって窺われるように、——もっとも決してプロレタリアの自由とはいわないというのは明らかに曲言である。それを言えばこそ、なおさら、人間の自由ということも言われてくる——正当アナキズム派は、政治なるものを支配者の搾取機関であるとし、最後の被支配者——即ち搾取すべき対象を有さない——にとつては、全く必要でないのみか、利害の相反するもの——無産者が政治に参与することは、それだけ支配者に偽瞞されること、それだけ革命を遅延せしめ、意識を緩和、そして墮落せしめることになると考えている。故にこの立場にあるものは、かの労農ロシアの独裁政治を支配しつつある少数官僚なども、形を変えた支配者、という意味で見ている。支配者はあらゆる名と形の中に潜み入ることによって、搾取を続けることを廃めない。中世紀の末、世の混乱に乗じて現われてきた勢力をさして、

この新たな牧者の言葉

信すべきだろうか

果して真にそれは

平和の使者なのであろうか

人々は

いまや絶対に彼を信じている

平和と自由の社会の

逐にきたことを喜び祝っている

だが彼もまた

平和の使者の仮面の下に

羊の群を襲うて却掠するところの

泥棒猫でありはしないか？

と歌った詩人がいたが、その通りであつたのである。

無産者を新しい支配者と見ることでできない——なぜなら彼は搾取すべき対象をもち得ない、そして搾取のないところに支配はあり得ない——考え方によっては、無産者の台頭は、同時に全人類の台頭である、とされる。かくてその勢力の漸次的な増大は、反比例的に全ての意味における政治なるものを失墜せしめることになる。その場合にあって、政治は自己の生命を長びかせんがために、無産者への順応と、阿諛の形をとって出てくる。仮りに今、無産者が無産者自身の政党を作ることを行ななくても、従来の政治家の中から、必ず無産者を目がける一派が現われ、堂々と無産者なる名前の下に、無産者をあらゆる形において偽瞞し、ねじまげるに違いない。また無産者自身によって作られた無産党である

468

にしても、政治なるもののもつ約束によつて、やがては偽瞞的、搾取的なそれと、全く同一のものと変わるものである。何となれば、政治という形式のために決定せられて。

右のように考えるものにとつては、藤森氏のいう「過程としての政治形式」というものに對して、多くの疑いなきを得ないとされる。それは、ミイラとりがミイラになるという言葉と同意義の結果を招くことになり果てると考えられる。

マルクスは国家を否定した。しかし過程として国家を認めるのみでなく、国家的意識を取用する。それはそれと同化する危険がある。事実、マルクス主義の徒は、全くその出発点における「自由」への見透し——この見透しのあるところには意識もある——を自己否定し、あたかも前代の権力主義者と、何等変わりなき意識によつて、その世界観を打ち建てつつある。

かくて、マルクスの系統は、応々かく自己を見失う危険に曝されるのである。

そのことは、真つ先きに、マルクスの弟子たちによつて、直ちに實際的に例証せられた。この弟子たちは、マルクスのもつ自由に関する「目標」を見失ひ、ただに過程としての国家的意識を過重視し、それに没頭することによつて、殆んど全くかのラッサールと同じ見解に立つに至つた。

カウツキイは「無政府主義者は国家を否定し、マルクス主義者はこれを肯定する」かの如く言い、ベエベルも「従来の意味における特権的、搾取的な国家でなく、真の透明な事

務的機関としての国家」の存在を説いた。しかしマルクスは、そうしたあらゆる意味における国家であるにしても、国家という形式——即ち上からの統一という形式は、階級的抑圧の形式であるといったのである。

しかし、目標よりは、むしろ過程を重しとするマルクス主義にあっては、そして目標と過程とが、相反する意識において解せられるマルクス主義にあっては、過程としての権力意識の重視——そしてそれへの没頭、さらにそれに基づく墮落ということは、全く避けることの至難な、むしろ不可能なことであるとすら言わねばならない。殊に、實際的に運動に入る時、そこにおいては目標の自由意識は全く消し去られ、権力意識によってその方法の押し進められることを特徴とするマルクス主義にあっては、実際の運動家であればあるほど、その人々の考え方は、目標とは反対のものになるのである。マルクスとベエベルの相違は、書齋人と街路人の相違に外ならない。書齋人は、その思想の経路を幾重にも折り曲げることも、また積み重ねることも意のままであるが、街路人にとっては、ただ一つの方向のみが決定せられている。即ちすべての過程と戦術における意識は、その目標におけるそれと同じ質のものであるということである。

自由を目標とするものは、あくまでも自由の意識によって戦う、常住不断自由の意識をしかと持ち続ける。それによってのみ目標へと到達することができる。

それと同じように、権力の意識によって戦うものは、権力の完成へと、一直線に進んで

行くことになる。それが結果において墮落となるものであらうと、権力の意識と戦術とを取用したということそのものにおいて、彼は實際上、斜面の一点に突っ立つものであるから、それがやがて滑り落ちる行動となって現われるであらうことは、既にその時、決定せられているのである。

マルクス主義の現われが、理論から実際へ移るに従って、第一の社会民主主義となり、更に第二のそれとなって、やがてマルクス主義それ自身をすら否定する傾向のあることはこのためである。

六、過程ということ

『女人芸術』の座談会で、織本貞代という人が、「皆が一足飛びに無政府主義の時代がくるように考えたですけれども、それはプチブルジョアの考えでありました」といっている。彼女は即ち、過程論から政治運動に入ったのであるが、彼女はさて、どんな未来をこの先もつであらうか。「皆が一足飛びに労働政府時代がくるように考えたですけれども、それはプチブルジョアの考えでありました」といって左翼の社会民主主義者として「現段階」を唱えるか、あるいはそれとも「その立場もまだ過程に見る時、より多く理論的であり、非実際的であった」として右翼の社会民主主義を求めるか。それとも、民政党的中野という人のように、

「無産党もよいが、民衆は一足飛びにはついて行かない。むしろ既成党の中から無産党への運動をおし進めて行くのが最も現実的な必然の過程だ」というように考えるか。

過程ということは、こういうように、どんなにでも言えることだ。

過程ということの恐るべき理由は、それがしばしば支配者の偽瞞であり、またたとえ発生的にはそうでなくても、結果として支配者の陥し穴に我から進んで落ち込むことになる点にある。

いったい過程というものは、被支配者にとっては好ましいものではない。被支配者は直ぐにでも自由の社会のくることを望むから、従って自由への一途の意識を持ち続ける。これを支配者が圧迫する。この支配者の圧迫と被支配者の欲求との相克による、長い闘争期間の持ちつづけ、それが即ち過程であって、過程の意識は、自発的に取用さるべきものではなく、他の力によって構成されるものに他ならない。

被支配者の力づよいうごめきを感じられれば感じられる程、支配者はそれへ順応する形をとって、被支配者の立ち上がりを遅らそうとする。それが彼等の圧迫の一つの形をかえた方法で、そこには必ず過程論が持ちだされる。時期尚早とか、既政党の中からとか、合法無産党によってとか、共産主義者独裁を通じてなどというように、これらはすべて支配者の形を変えた乱舞にしか過ぎない。

過程論のあるところ、そこには多くの偽瞞が横たわり、詐術が行われる。かつてはブル

ジョア婦人運動として、極度にまで排撃されたかの観ある婦選獲得同盟辺りの政治運動も、過程論の横行と共に、その存在の価値が承認され、「まず自由主義の中から」とすら言われていることを耳にする。

同じ無産党の陣営にあっても、過程が幾段階かに分かれ、そしてそれが、ことごとく「過程の名において」声明書を発しているのである。

無産大衆党——極左主義者の「輝ける」指導精神が見棄てた卑俗な現実の大衆を、我等は無産階級の陣営に迎え返さねばならぬ。故に我等の政党は、ただに無産者の政党であるばかりでなく、同時に大衆の政党であるために、労働者と、農民と、一般労働民ないしは勤労民の初歩的な利害を代表するものである。また、「輝ける」極左的指導精神の結果する宗派的分裂と、その意味における分散的な闘争の方法は、戦線の統一と共に共同した闘争に変えられねばならぬ。この「大衆」的党であることと、戦線統一党であることこそ、現下の情勢に応ずる無産党の当然の最も現実的なやり方である。

日本大衆党——「大衆」的党であることと、戦線統一党であることに異議はないが、それを實際的に可能ならしめるためには、形式の上からだけそのことを要望するのではなく、指導内容において、「大衆」的であることが必要とされる。早くいえば露骨な共産主義的な指導内容を、卑俗な現実的な大衆の上へ緩和することである。故に我等の当面の目標は、

理論闘争に基づく暴露戦術ないし既成意識破壊の運動よりは、むしろ一層より建設的な方面、すなわち実際的大衆をいかに無産運動に動員するか、「方法」に力点を置くものである。この「方法」に根づけられる考え方および行動にこそ、解放への過程として最も現実的な意義が認められる。

社会民衆党——我等は共産主義を否定する。そしてそれとは別な、明瞭な社会民主主義の精神に基づいてこそ、無産運動をおし進めることができることを知っている。

共産主義の目がける独裁政治は、事実上、無産階級の一部が無産階級の他の部分ならびに旧有産階級に対して行なう独裁政治である。即ちその言うところの無産階級の独裁政治は、実際は共産党の独裁政治に外ならぬ。現にロシアがその通りである。ロシアに於ては共産党のみが合法的存在を有し、他の無産政党は存在を許されない。更に注意すべきは共産党自体に於ても民主主義が行なわれない。党の最高権力者の意志と多少異りたる意見を有する者は、手厳しい圧迫を受け、投獄流刑の憂目に遭わねばならぬ。かかる状態に於ては、無産階級の独裁政治というものの、事實はごく少数の権力者群の官僚政治である。そこには、必然的に陰鬱なる探偵政治が跋扈する。（もし今日の最高幹部が死んで、他のより劣悪な個性の持主がこれに変わったならば、民主主義の行なわれないかかる独裁政治に於ては、その危険は計り知ることのできないものがある）

しかし、また他の見方からすれば、ロシアであればこそ、即ち今日なお古い農業経済に

依拠しているところの、然して近世民主主義の洗礼を受けない、だから無自覚で愚昧な無産大衆に満ちている国であつてこそ、始めてかかる独裁政治が受け入れられたので、多少なりとも民主主義の発達した国においては、かかる官僚政治は、到底可能ではない。

この意味において、近世民主主義からの次の発展形態である社会民主主義こそ、最も必然に、新しく台頭した無産大衆の取って進むべき道である。

というように、過程論において、かく幾つにも分かれ、それぞれの理屈が、そこに述べられるのである。

無産大衆党は、共産主義をなお固く内に潜め、表面にそれを現わさない。そしてそのまま、戦線統一とか「大衆」の奪取を策することを、その現実的な戦術であるとしている。

しかし、それは戦術として既に古く、大衆は鋭い感覚によって、直ちに彼等の内なる精神を見抜くから、彼等の意図する戦線統一も、大衆の獲得も結果として不可能に終ることが多い。

そこで日本大衆党は、一步進（？）んで、思想的に、露骨な共産主義を捨て、ある大衆的な、そして当面の実際の立場における態度を目がける。しかし、こうなると、当面ということがその全部であり、遠い目標も、深い基調も、ここには認められない。故にその意識も、行動も、浮草の如く不確かである。

それが更に進んで、社会民衆党になると、もはや全く共產主義を捨て切った、否、それとは別個の立場において、自己の存在を主張している。

かくて、それぞれの意味において、必然とか、過程とか、段階などということが論じられ、そのいずれが真の過程であるべきかは容易には分からない。

過程という觀念の中に踏み入ったからには、そこには次々と幾つもの過程の見出されることは余りにも当然である。

現段階においては、既成党の中から無産党を目がけるべきであるものも一つの過程であり、また自由民主主義を一步出た社会民主主義に基調を置くということも過程としてもっともらしく感じられる。

しかし、かかる時において、われらの唯一の目標であり、近世社会主義の究極の理想たるアナキズムの社会を望み見る時、いかにその遠く、もしくは全く別個の社会であるかの如く考えられることであるか。

今日の「過程」の渦巻の中に立つものは、そうした自由の社会よりは、むしろラッサールの望み見た社会こそ、今日からのつながりである様に思われ、そして肯かれるのである。何となれば、今日の「過程」にある全ての団体は、従来の支配者と同じい権力の意識およびそれによる方法を取用しているからである。

被支配者が、当然もたねばならない自治の意識とか、自由の意識とかいうものよりは、

従来および現在の支配階級がもつ権力とか、強制とかいうことの方が、彼等にはむしろ近いように考えられるからである。かくて彼等は意識的にも方法的にも、全く支配階級と一つのものとなり、従ってその目がける実際上の目的地点もまた、支配階級的のものとして受け取られるのである。

もし、マルクスのいうように、無政府の社会が、我等の目がける究極の社会であり、自治と自由の時代が、必然に来るべきものと解されるならば、今日において我等の上に自治意識の芽生え始めることはごく必然のことだし、その自治意識をいたわり育てることは、被支配者の階級にあっては当然なざるべきことではないか。だのに、過程論者は、せっかく目ざめつつある自治意識を「過程」の名において無理に踏み殺し、従来の権力意識に基づいてのみ、その世界観を打ち建てようとする。

かかる過程論者をさして、むしろ支配階級の廻し者であり、第二の支配者であり、ほんとうの無産者の意識を、少しでも長く頭を上げさせまいとする彼等の窮余の、また誤魔化しの政策であるとするのは、極く当然なことではなからうか。

いずれにしても、過程ということ及びそのものもつ役割については、多くの疑問の余地があり、また既にそれに対する幻滅の日が、実践的に近づきつつある。——なぜなら、それらの論者は、それを実行に移すと共に墮落し、そして反動化しつつあるのが、今や白日下に認められつつあるからである。

七、過程の経済的基礎

藤森氏は、「今更アナの人と議論する興味はない」という。何故か、その信奉する主義を絶対のものとして考え、その指示する方向を、必然的のものとして肯づいているからであらう。

しかし、ある一個人——マルクス——の説くところを以て、「精神不可侵のものとなすことは、近代科学の批判精神に背くものでなければならぬ」

昔、煩き学派の徒がそうであった。彼等によれば、世界の最も深い奥底は探られ、その謎は余すところもなく解決されたのである。故に、学徒の仕事は、それに何ものかを加えることではなく、既に示顯せられているものに、論理的証明を与えるだけのことである。

そしてかかる確固不動の知識が、取りも直さず教会政治の基礎であった。

かくてその時代にあつては、僧侶のみが——今は共產主義者が——独り総ての知識を有している。けだし彼には救済の教義があるからである。もし、ここに一人の人があつて、教会の制度に矛盾した彼自身の意見を擁しているとすれば、その人は直ちに自分は悪魔に——今日では小ブルの立場において——誘惑されて、かく虚偽の観察や虚偽の判断を下しているのだという結論に達せざるを得ないのであった。

故にその時代にあつては、起こりうべきあらゆる事柄は、皆聖典に書いてあった。聖典

は全ての事物に対する真の説明を含んでいた。問題は、唯正当な言葉をえらんでそれを誤りなく解釈するということであつた。

いかなる学問も、それが教義に反するらしく見える時は、ことごとくこれを拒絶した。

かくてその時代の学問は、事物の真の関係を示すものではなく、唯一度示顯された真理の適用をのみ示すものであつた。新たに発見せらるべき何物もなく、随つて科学者は、「磁石とは何か。それは夫婦間の仲違いを直し、総ての人の心を和らげるために存在する」といったように解釈した。また、世界における唯一の問題は、人間をその墮獄から救うことにあるから、自然研究などに対しては、興味も深かつたのである。

この状態——ある一つの教義を神聖不可侵とすることを基礎とする、非科学的な無批判的な状態の下に、社会はその進歩を堰き止められ、全ての学問および考え方は、かつて自由であつた原始のギリシャ時代等比べて、驚くべく退歩したものとなつた。

藤森氏の示している態度もまた、右の宗派的にして、非科学的であつた中世紀の精神と、ある一点において全く共通しているかのように認められる。

氏等は深く省みることもなく、異説に対しては直ちに「小ブル」の名を与え、「今更議論する気にはならぬ」と高く出る。

しかも、氏等は余りにもその信ずる教義に頼り過ぎ、——もっとも氏がどれだけの教義を理解しているか、それは知らないけれど、しかし宗派的信者にとっては、理解という

ことは不必要で、ただ盲目的に、その教義を偉いとしていればいいわけであるが——その結果、社会は、マルクスの示した過程の通りに進化して行くものと決めてかかって、却って冷静な立場からの観察を我から進んで拒否することになってはいないか。

今日における世界の経済事情について、とりわけ興味ふかく考えられることは、古い農業経済の基礎の上にプロレタリアの国ロシアが成立しており、——ロシアの年次予算は、農産物の収獲期に、行なわれ、ロシアの輸出貿易も、都会の消費も、軍隊の維持も、その全てが農業経済に依拠されている。——新しい工業経済と大農組織の国アメリカに、プロレタリアの進出が認められないことである。

新しい工業経済と大農組織こそ、プロレタリアにとって、必然の母胎であるといわれ、プロレタリアの革命は、この経済母胎を過程として、そこから展開するものと考えられているけれども、近着の一アメリカ雑誌は、資本主義経済の推移と題して、資本主義経済は既に攻勢から守勢の域にと迫り入っている。かくて自ら当然の分解作用を起こすことの一つに、将来のその自己維持が可能とされるに過ぎない。

ひとくちに言えば、資本主義経済は、その外形においてはまだ膨張する。しかし今やその膨張すらが、自己否定の形におけるものである。何となれば、今日見られるトラスト、カルテルの如き、もはやそれは、大量生産のためのものと、生産制限のためのものとを問

わず、資本の蓄積が、資本の浮動へと移行行つたことの意味になる。資本は一個人の手には蓄積されずして、多数資本家の間を浮動するが、しかし、その姿勢のおし進められる時、それは多数資本家の間を浮動するのみでなく、広く全社会的の意味の上において、全社会人の生産と消費の間を浮動する。そしてその時、一の資本家なるものは、全経済の転軸手たる、一個の影淡い存在と変るのである。

個人としての資本家なるものは、かくて次第に、全体にとって無気力なものとなり、全体の宿命的な統制と機構との中にある、生活を喘ぐところの存在と変る。かくてまた資本主義経済は、科学の進歩による機械の革新、および特殊資源と資本を要せぬとする生産形態の進出等のために、一大分解作用を惹起し、そして当然没落するが、その場合にあつて、形態は最早や、今日見るような集中もしくは普遍の状態から、分散的、連合的な形態へと進み入っている。故にそれはそのまま、営利を中心とせず、生存を中心とする人類生活の欲求と、そしてその理想とに合致するところのものである——と論じている。

これによると、資本主義経済は、大工業と大経営の形態において中断もしくは廃棄されるというようなことなく——従つて、その形態を新興プロレタリアが踏襲し、そこから進展するということなく——自己分解の作用によって、我々が理想の社会として目にかけている社会へ、彼等もまた必然的に落ち込んで行つて、そしてそこで破滅するということになるらしい。

何れにせよ、資本主義経済の前途はまだ長い。しかし、世界戦争を一転期として、言うところの攻勢から守勢にと迫り入ったことは、それは事実であるように考えられる。

目ざましい大量生産のかけには、利潤の固定、もしくは減少——そして永久にそうであるかも知れない——を伴うところの内面律が付きまとうている。

フォード的積極的経済政策も、必ずしも内面において、そして、そこを立場として言えば、「積極的」ではなく、却ってそれに反しているとすら言われている。

しかし、今やそうした行き方をするのが、宿命なのである。資本主義経済は、かくして蓄積から浮動へ、集中から普遍への道を辿って進まねばならぬ。

その意味における先頭を切って進み出たものは、誰も知るように、アメリカの工業王フ・オードであった。

従来の考え方では、資本家は労働者を出来るだけ安い労働で、出来るだけ長い時間、働かせることが、その生産の形式と性質からいって、必然のこととされた。マルクスの経済論等も、主にこの意味の生産の形式と性質を基礎として確立されたものであるといわれる。

然るに、フォードにあっては、一九一四年において、一日八時間制と最低労銀五ドル、更に一九二六年には、一週五日間労働の例を開いた。フォードは高い労銀、低い売価、大量の生産の三つの目標を掲げて進んだ。その結果、彼の政策によって多数の人々が有利な労働に従事することが出来た。

フォード以後の資本主義経済は、かくて従来の生産の形式と性質とから一転回し、蓄積から活動へ、集中から普遍への道にと迫り入った。そしてそれは、資本家個人の自己否定、もしくは無気力化への道であり、全体としての一大資本主義経済の全世界的彷徨の第一歩であるといわれる。

資本主義経済は、今や全体としての形において彷徨する。それは資本家個人の意思によるものでなく、実に資本主義経済そのものの宿命によるものである。

近頃、欧州連盟などということが言われているが、それなども、経済の重圧の結果である。我々は今日深い興味を経済方面にもたずにはいられない。

だが、こうした経済方面の動きのかけにあって、それを更に将来、根底から変えてしまふであろうところの科学の進歩の芽生えが、徐々として伸び上がりつつあるのを、見逃すことはできない。

その第一は、機械の方面において驚異的な革新を見るであらうということである。常識で考えて見ても、機械がその組立てにおいて、また動力において、今後いかに進歩するであらうか。野蠻から文明へ、繁雜から簡易へ、そして全ての無駄が除かれ、それによって能率を増進する——これは機械においてもそうなるのではなからうか。

鉄と石炭と蒸汽によって代表せられる原始的機械文明——膨大で野蠻で威圧的な——は、輕銀と電気とによる形式的には簡易化された、しかし内面的には驚異すべき能率をもつと

いと認められているだけでなく、興味ふかい方向へと辿り入りつつあるといわれる。

藤森成吉氏にしても、いま少し控え目な、というのは冷静な態度で物を言うことは、今日の場合、必ずしも男を下げることにはなるまい、と私には思われるが、果してどうであらうか。

あまり頭高な物の言い方は、却って氏自身のためにもどうかと思われる。